保育者養成における音楽表現系のオンライン授業
―その課題と効果性―

Online class of music expression system in childcare worker training
- Challenges and effectiveness-

児童学科・保育科
笹井 邦彦・細田 淳子・西海 聡子・小田切 舞美・蟹江 春香・佐伯 美和・坂田 すみれ
清水 千恵・篠崎 智・鈴木 順子・高田 有香子・古川 和代・松本 哲平・本山 美和
森 智香子・山下 彰子・山本 優子・悠木 昭宏・湯原 千史

周知の通り、2020年4月の新年度からCOVID-19の影響を受けて国内の大学の多くがオンライン授業を実施している。勿論、かつてから大学におけるオンラインによる授業は補足的に活用されてきているが、全面的にオンラインとなるのは初体験であり、各大学、学生共々に困惑していることは事実である。

今回の状況において、本稿で検討を行う、本学の保育者養成の授業、とりわけ音楽表現、及び音楽技術的な領域の授業については、文字媒体での理論理解とは異なり、直接の対面による「人と人との伝授[1)]」を基本としている領域であることから、筆者らの戸惑いも大きいと言える。

この「人と人との伝授」とは、人が音や音楽を感覚野、つまり、五感によって相互に直接的に受容し合いながら、学習者の感性、表現力を涵養することであるが、前提としてフィルターを通さない現実的な関わりが重要なファクターであり、視覚的情報、また、音の空気伝達が前提であることは識者の見解でも多く散見できる。[2)]

しかしながら、一方で音楽表現教育の多くは比較的長い時間、期間による経験値であるという主張も多々見られる。つまり、表現教育や音楽技術教育にありがちなアセスメント不足による一方通行の伝達、かつて論議された検閲的レッスン[3)]等々の手法については、たとえ、人と人との対面であっても、その効果は期待できないことが容易に想像できる。

以上のことから本稿では、この状況下の中、改めてその辺りを整理しながらオンライン授業においての音楽表現教育、なかでも鍵盤学習、及び歌唱指導の授業の実践的な取り組みを通して検証を行い、その課題と効果性について纏めてみることとする。

1．保育者養成における音楽表現教育について

ここでは、まず保育者養成における表現教育、及び音楽技術教育の意味について纏めてみる。

保育者養成とは、文字通り、乳児から幼児期の保育に携わる保育者を育てることであるが、基本的には保育理論を理解した上で、その指導法について学ぶということである。なかでも、表現教育については、乳児から幼児期における表現についての内容と方法を理解した上で技術的な資質養成も含みながらその指導法を学ぶと言うことである。

周知の通り、乳幼児の音楽については、『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』（以下、「教育要領等」と示す。）で示されている通り、保育内容「表現」で括られており、音楽に関係するものを抜粋すると、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して，豊かな感性や表現する力を養い，創造性を豊かにする。」である。さらに、ねらいや内容を纏めてみると、子どもなりに感じたことや考えたことを歌や打楽器、あるいは身体で表現して楽しむということが基本である。

言い換えれば、芸術表現は結果を求められがちであるが、保育に求められることは子どもの表現を受容し，幼児自身の表現しようとする意欲を受け止めることが必要で、表現するその過程を大切にするということに集約されている。

従って、保育者養成での音楽表現・技術教育においても技術的なことに優先して、子どもたちへの指導は子どもと共に楽しむこと、また、その楽しんでいる活動の過程を大切にするという視点が強調される必要があると言える。

次に、子どもたちの音楽についての先行研究について触れておく。

子どもと音楽についても内外問わず多くの研究がなされているが、なかでも子どもと音楽については、子どもの発達上の理解から、音楽というキーワードのみならず、全体的な捉え方が必要であると言え、乳幼児の音・音楽反応すべてが音楽行動と解釈するといった捉え方が一般的である。なかでも、発達上のキーワードでもある言葉、身体表現、リズムと言ったキーワードが散見される。

板野平は、講演のなかで[4)]、「子どもの音楽反応の多くは身体、言葉、そして音楽三要素の一つであるリズムであるし、その涵養は教育的効果が高い。」と述べている。つまり、教育要領等に照らし合わせても一致する点であって、その保育者を養成する立場からも、技術的なことに優先して、学生一人一人の個性、あるいは音楽的経験値をもとに支援する必要があり、また実態によっては音楽を楽しむ行動へと導く必要があるということが言える。

2．音楽教育における音や音楽の伝達の重要性（対面教育の重要性）

対面教育について有賀亮は次のように主張している。重要と思われるので少々長いが引用してみる。[5)]

『ヒトとヒトとが対峙する教育においては，教師の発話や態度が学習者に影響すると共に，教師も学習者から影響を受けるというインタラクティブな関係である。ところが，近年急速に発達しているｅ－ラーニングでは対面によるコミュニケーションの有するメリットを必ずしも期待できない。その点について，実存主義哲学者であるドレイファス（2002）は，対面式授業では受講者は講義テーマについて尋ねられるかもしれないというリスク，教師は答えられない質問を受けるかもしれないというリスクを負っており，録画されたビデオによる授業ではそのようなリスクが伴わないため，質の良い学習環境を提供したり，質の良い教師をつくり出したりすることが難しいかもしれないとしている。ヒトとヒトとが対峙する対面式教育における音声言語コミュニケーションにおいては，実は話し手と聞き手が互いのメッセージをさぐりあいながら，相手の発する信号を有意味な情報に転換している。それは相手の発信する情報を探索する能動的なコミュニケーションがなされていることを意味する。ヒトは情報を能動的に探索しながら，情報を創り出す存在である（野嶋2002）。従って，教育現場における教師と学習者の音声言語コミュニケーションは，さまざまな形で互いに情報を作り出そうとしているプロセスになる。音声言語コミュニケーションによって互いに情報を作り出そうとするところに，ヒトとヒトとが対峙する教育の意義がある。』

この主張は、保育者養成にも深く関係していることであり、さらには音楽表現教育にも大切な要素を含んでいる、まさに本質と言える。

3. 音楽教育におけるインプリンティング（対面教育のデメリット）

前項の対面教育の重要性については、確信するところではあるが、一方、対面教育の教育環境、方法、内容によってはデメリットとなり得ることについても纏めてみる。

前段で述べた通り、音楽表現教育、なかでも技術を伴う内容は比較的長い期間による経験値であるという主張も多々見られる。また、かつて多くの論議を呼んだ教授＝学習過程にありがちな一方通行の伝達、検閲レッスンと言われる手法については、たとえ現実的な対面であっても、感覚性の伝授とはほど遠い内

容であると言える。

歴史的には、日本の演奏技術を求める教育は、明治初期から欧米の手法を取り入れ、芸術的な鍛錬を重視し、側面的には学習者の考え、想い、創造性に優先して教える側の論理が絶対であった。

さらに、ピアノに代表される楽器の習得は学習者の予習・復習で成り立っていることも推測できる。

また、保育者養成についても例外ではなく、かつては芸術的な思考が強い傾向であった。ただ、このような状況については、かつてから幼児教育界からの提唱などを受け[6)]、大幅に変更されてきてはいるが、現在でも、実質的な指導場面において多々見受けられる教育法でもある。

これは、保育者養成においても、子どもたちの音楽表現指導には技術を伴う側面があることから一定程度の理解は必要であるが、とりわけ、音楽経験の浅い学習者にとっては、音楽的技術の習得は難解であり、様々な考慮と工夫が必要と言える。

これらのことについては、大変な難題であるが、工夫の一つとして、インプリンティング（刷り込み）という主張がある。つまり、良い意味で、繰り返しの学習であり、スモールステップ、あるいは螺旋的ステップアップ[7)]が望ましいと言うことである。具体的には言語指導、演奏に特化した教育だけではなく、視覚的にも豊富な教材を通して理解していく教育を指しており、また、一過性の学習内容についての疑問の解消であり、感覚性が必要となる領域への精神的な援助、学習者自身の表現の充実、達成感が必要であることを指す。

つまりは、対面教育のデメリットとして、様々な考慮がなされていなければ、逆に学習者の意欲低下、創造力の低下を招き、技術的なことに対する成長も望めないと言っても過言ではない。

4. K大学における従来の授業内容と形態

さて、ここでは、K大学で実施している「子どもの歌と伴奏」の従来の指導形態とその内容を纏めてみる。

いわゆる子どもの歌の弾き歌いと言われる授業であるが、従来の対面式授業では鍵盤、歌唱学習は通例のクラシック教育ではなく、独自のメソッドでテキストを出版し行なっている。[8)] そして、学習理念の概略は以下である。

○子どもたちに歌の歌詞、メロディーの美しさ、リズムの楽しさを伝えるための学習を基本とするため、鍵盤学習を簡易化する。

○歌唱指導については、歌詞の意味理解、明確な発音を優先する。

○コードによる伴奏法は、従来の三和音からの学習ではなく、独自の過程で行う。

○補完として、楽典、読譜、リズムエクササイズを取り入れる。

対象学生は学部生・短期大学部生1年生（女子300名程度）、指導教員19名、実態としては毎年のアンケート調査から、概ねであるが鍵盤学習の経験が多い学生は約2割、初学者は約2割、6割は中程度である。

歌唱は、合唱等の経験のある学生は少なく、比較的経験の浅い学生が大半である。

授業形態は初心者、及び長期経験者のみ、グループを設定し、その他は自然集団でグルーピングを行っている。（指導教員1名に対しておよそ5人から8人程度で授業時間は100分）

(1) 具体的な学習内容

①コードによる伴奏習得の過程（過程は習得状況により反復、省略）

英語音名からの根音伴奏（初学者についてはスムーズに取り組めることと、歌唱優先が可能となる）

↓

根音＋5音伴奏（オルタネートバス）、根音と5音の組み合わせによる伴奏

↓

根音＋5音＋高音部に3音によるアルペジオ伴奏

↓

コードの三和音による様々な組み合わせによる伴奏（但し、低音部では重ねない）

↓

譜面の学習として大譜表を読み取る学習

↓

コード学習の進度によってリハモニー学習（学生の負担にならないように配慮）

②歌唱指導の過程（過程は反復する）

歌詞の意味、言葉の発音（朗読等による）

↓

発声は従来のベルカント唱法には拘らず、学生の経験により多様に捉える。

↓

鍵盤でメロディーのみ、あるいは左手伴奏で歌唱（鍵盤伴奏は経験値による）

↓

メロディーのリズム、フレーズ感の学習（ソルフェージュ）

③楽典、読譜、リズムエクササイズ（鍵盤、歌唱指導にも織り込んでいるが別途に設定）

テキスト、及び別途講義等による

④その他として、学習の記録を残し、学生自身の振り返りを行う

5. 従来のメソッドを基本としたオンライン授業への取り組み

2020年4月からの（実際には準備検討期間もあり5月から実施）オンライン授業に当たって、本授業についても様々な検討を行ったが、可能な限り前項で纏めた従来の授業方法、内容を踏襲することとした。

まず、そのためにピアノ（キーボード）所有の有無、経験年数、音出しの環境、PCの通信環境等の実態調査を行った結果、以下の通りであった。※学生数311名中295名が回答

ピアノ（キーボード）所有の有無と経験年数					
	ピアノ経験無し	1年未満	1年～6年	6年以上	計
鍵盤あり	55	38	67	94	254
鍵盤なし	22	7	8	4	41
計	77	45	75	98	295

※鍵盤を所有していない学生については、大学より66鍵キーボードを貸し出した。

練習環境-弾ける＋歌える（音出しの問題）				
	弾ける	小さく弾ける	弾けない	計
歌える	142	9	8	159
小さく歌える	43	59	21	123
歌えない	6	5	2	13
計	191	73	31	295

アンケート結果は様々な状況と判断されるが、特に練習環境として若干ではあるが、声出しが出来にくい学生がいることは気がかりであり、練習の担保が難しい状況の学生がいる。

また、ネットの環境において、大学からのノートパソコン貸し出し、環境整備費の支援はあるものの、通信容量の制限がある学生も多々見受けられることもあり、時間的な制約も考慮する必要があることも分かった。

(1) 具体的な取り組み

2020年5月から実施した前期の授業について纏めてみる。

①オンライン授業のネット選択

K大学では、従来からクラウド型教育支援としてmanabaを活用しているが、課題提示、及び連絡等は主にmanabaを利用し、当初は資料課題提示タイプ授業とした。また、リアル配信タイプの授業を基本としたいため、様々な交信手段があるなか、担当教員のオンライン会議において、最も映像と音声のずれが少ないと思われる、Google chat,及びGoogle meetを使用することとした。ただし、リアル配信タイプの授業については、すべて自然集団のグルーピングを行い、担当教員と学生とのコミュケーションを優先することから始めた。

②授業スケジュールと内容

リアルタイム配信の授業を基本としながらも、理論的な学習を担保するために、文書課題を並行的に課した計画である。

	資料課題提示	リアルタイム配信授業（グループ別）
1	①英語音名の学習 イタリア音名、ドイツ音名、日本音名と比較しながら英語音名を鍵盤上で記憶し練習問題を解き、解答を提出する。 2回目に①課題の解答と解説を掲載する。 ※学生の自己採点	準　備
2	②コードにおけるメジャーコードの構成音 三和音が構成されている理論を音程度数ではなく、鍵盤上の半音距離で理解する。 練習問題を解き、解答を提出する。 3回目に②課題の解答と解説を掲載する。	準　備
3	③コードにおけるマイナーコードの構成音 三和音が構成されている理論を音程度数ではなく、鍵盤上の半音距離で理解する。 練習問題を解き、解答を提出する。 4回目に③課題の解答と解説を掲載する。	準　備 ※グルーピングメンバーを発表
4	④音楽の基礎（３要素） 解説文書を読み、読んだ感想や質問などを纏める。	①ここでは、担当教員、学生共々、オンラインが初体験であるため、ネットの繋がりはどうであるか、映像、音声とも良好であるかなど、コミュニケーションを取ることから始める。 また、学生は鍵盤と手が入った映像が撮れるかの確認も行う。 場合によっては、弾き歌いの出来る学生は、教員のみ、あるいはグループで視聴する。
5	⑤音楽用語・記号（テスト形式） テキストの音楽用語・記号を見て問題に解答し採点する。 ※学生の自己採点	②ここからは、従来、対面で行っている内容を状況判断のもと、レッスン形式で行う。ただし、学生のプレッシャーなども配慮しながら個人、またはグループでの視聴によるレッスンを行う。
6	⑥自己の音楽体験の記述 課題「幼い頃、好きだった歌や、歌って楽しかった歌はなんですか？」、「また、答えた歌は、なぜ好きだったか、なぜ楽しいと感じましたか？」 文字数は、400～600字程度	③これ以降については、個人、各グループの実態に差異があるため各担当教員の創意工夫により取り組む。 ※内容については全体的な方向性のみを確認する。 ※毎月、担当者全員によるweb会議を開き、情報交換を行う。

7	⑦授業の振り返り記述 　課題「実際に弾き歌いをしてどのようなことを感じましたか？どのような工夫が必要でしょうか？」 文字数は400 ～ 600字程度	各グループによる
8	各グループによる	〃
9	〃	〃
10	〃	〃
11	〃	〃
12	⑧「学習の記録」の記述 　授業で取り組んだこと、気付いたこと、自身の課題等を纏める	〃

※12週の期間内に２回分の授業に相当する課題等の提出や映像視聴などを含め14回分（100分×14）の学修時間を確保している。

6. リアルタイム配信授業の取り組みにおける問題点

前項で示した計画において、リアルタイム配信タイプに顕著な課題が多かったため、リアルタイム配信タイプの授業を行った際の問題点を纏めてみる。

(1) リアルタイム配信タイプの授業の前提となるネット環境の問題点とその取り組み

・音声と映像のタイムラグが弊害となり、鍵盤、歌唱のアンサンブルが出来にくい。

・音色、音程、響き、息遣い、身体の使い方等、細かいニュアンスが伝わりにくい。

・学生が感覚的に音楽を学びにくい。

（音楽経験が少ない学生にとっては、楽曲や場の雰囲気、呼吸、リズム感などを共有できにくい）

・マイクを通しているため、学生の実際の声量が分からない。

・視覚的にも演奏している全体像が掴みにくい為、部分的に判断した授業となる。

・声を合わせて一緒に歌う心地よさや、違った伴奏で歌った時の感覚の違い等、体感することが出来ないので、音楽表現の指導、特に歌唱指導に限界がある。

やはり、想像は出来得たが、資料提示による課題提出は比較的伝わりやすく、理解度も高いと判断されるが、リアルタイム配信による授業は、歌や音楽に関して、感覚的な伝授と言ったことが重要な視点であるため、この辺りのコミュニケーションが取れにくいことが最大の難点として捉えることが出来る。

また、学生のパソコンスキルについても課題があげられ、スマートフォンは慣れているが、パソコンを苦手とする学生も多いため、スマートフォンによるリアルタイム授業が通信状況を悪化させている要因とも考えられ、パソコンの経験値が上がることも期待される。

一方、教員側の取り組みとして、上記のことへの補完として、学生に演奏や歌唱を動画収録し提出させたり、教える側も予習・復習として、動画による解説、自身の演奏などを並行的にgoogle chat、google drive、あるいはyou tubeの限定公開にアップして補うことや、提出された課題動画にコメントや動画をつけて返信したり、質問が寄せられれば常時回答すると言った取り組み、いわゆるオンデマンド配信タイプによる支援が、より理解度、感性のやりとりが高められたということは大きな成果の一つである。

また、対面授業では授業時間100分に対して学生数は5人から8人程度であるので、個人的な関わりからすると単純計算で一人につき10分～ 20分程度である。その場合、口頭、もしくは板書して教える内容も限られるが、オンラインでは、学生は文書として何度でも確認出来ること、あるいは学生と先生方の文書、及び動画でのやりとりにおいて理解されていること、理解されていないことなどを確認することが出来、結果、対面授業では確認出来なかった理解度の有無が明確になったという点は大きな成果である。

つまり、こう言った問題点に対して、我々、教える側の工夫もさることながら、対面授業では気づかなかったであろう内容も多くあり、教授＝学習過程における検討するべき点が得られたということは注目すべきことと言える。

(2) リアルタイムオンライン授業におけるプライバシーの問題

対面授業では発生しなかった学生の意識について取り上げてみる。

これらについては、他大学等においても様々に報告があげられているが、オンラインの特徴である文書課題、回答については問題無いが、表現系の授業については、学生が弾いている様子、声を出している様子を教える側が視覚的に視聴することが必要であるにも拘わらず、積極的に身体、顔を映し出せない学生も若干見受けられ、指導が儘ならないケースがある。

つまり、対面授業であれば外出することも含めて、例えば、身支度等を整えているわけであるから問題は無いと言えるが、オンラインでのリアル授業では、自宅からのプライベート空間が映し出される、あるいは身支度を整える、整えない等があり、ある意味ではプライベートな部分が映し出されることへの精神的な負担があると言える。また、弾き歌いという経験的な技術を一度も他に見られていない学生については、視聴されるという不安感もあると言える。

この辺りは、個人情報の観点から繊細に対処する必要があることは言うまでもないが、学生の協力無しでは成立しないデメリットも存在する。

この辺りの課題は、当初、大きな問題と捉えていたが、リアルタイム授業の経験値が上がるにつれて解消されている傾向があったのと、その解消のために無理な強制はしないこと、あるいは一人一人の個人レッスンから少しずつ人数を増やしていくグループレッスンへと徐々に移行していった取り組みが少なからず効果的であったと言える。

(3) 歌唱指導の問題点

(1)、(2) においてのデメリットと共通する面が多々あるが、子どもの歌と伴奏における歌唱指導については大きな指導要素であるため、その問題点の概略を纏めてみる。

まず、第一にオンラインによるリアルタイム授業では、デジタル音源のため、ボリューム、ニュアンスが聴き取りにくい点が上げられ、また、口元を正確に確認出来ないことと、映像と音声とにタイムラグがあり、詳細な指導がしにくいこともあげられた。また、学生の多くは声を出すことや歌うことはあまり経験してきていないこともあり、従来の対面授業では、腹式呼吸のやり方、口の開け方、音の響かせ方など実例を見せながら身体の筋肉の使い方までを指導していたわけであるが、その点も指導の工夫が必要な点であった。

そこで、指導の工夫として全体的なことではないが個々の授業で取り組んだ点を以下にあげておく。

- 子どもの歌を先生方の歌唱、youtube等でよく聴く
- 発声の基礎としてまず文章で腹式呼吸のやり方を示す
- 口の開け方と母音の発音練習を文章で提示する
- 発声練習は録音したファイルを作り学生に伝えるようにする
- 声の出し方のサンプルと発声練習の音声ファイルを作り学生が練習できるようする
- いろいろな歌唱の練習方法はあるが、例えば、リズムを含む譜読み（音符を読む）や音楽上のアクセントを中心にしたテキスト（コールユーブンゲン）を使用し、歌い方の基礎的なものを提示する
- 歌を録音して実例を示し、練習しやすい環境を作るためにピアノのカラオケなども録音して提示する

こう言った指導の工夫はあるものの、実際には学生の歌唱に対する指導は、リアルで視聴したものに対して行うことが多いため、難点であることはあげておきたい。

7. 考察

さて、「子どもの歌と伴奏」の授業について、羅列的に基本となる識者の提唱とその理念、そして実際的な取り組みを述べてきたが、まさに青天の霹靂とも言うべき、オンライン授業への対応は、教師、学生共々、経験の無い中で暗中模索をしたということが正直なところと言える。

しかし、この一連のオンラインの授業を通して、オンラインのみならず、従来の対面授業を含めた教育目標と達成度について検討が出来たこと、とりわけ、従来、実施してきた通常の対面による個人レッスン的な教育手法の弱点を見つけられたことは、大義の意味で大きな成果であったと言える。

つまり、対面授業では作成、及び提示しなかったコードの覚え方動画、コードを楽しむための動画、リズムと譜読み（歌）の実践（コールユーブンゲン）の導入、初心者用ピアノ練習法楽譜の提示、授業前に準備した音声ファイルの提示、弾き歌いのサンプルの提示、発声の基礎（音声と文章提示）、コードの実践（音声と楽譜提示）、子どもの歌を聴いてみようの提示等々、文書や動画のやりとり、先生方独自の動画教材の作成等、個別の質問への対応等が対面授業では得られなかった教育的効果を生んでいたと言える。

以下に、今後の対面授業にオンラインで得た教育方法を取り入れる視点となる筆者らの意見を羅列してみる。

（メリット）

- オンライン授業での文書課題については実技だけではない学生の新たな一面を見ることができ、今後の対面授業でも有効に活用できるのではないかと考えられた。
- 初心者の学生たちがオンラインの授業だけでこれだけ成長することに驚いた。
- 対面授業時は、全員が見ている前で個人指導を行っているので、学生は周囲に見られている事を必要以上に意識し緊張してしまい、力を発揮できない事もあったがオンライン授業では、マンツーマン時、完全な個別状態となり学生は教員2人だけなので安心してありのままの状態を見せてくれているように感じた。また、教員と学生がお互いに、良い意味で飾らずに向き合えると感じている。
- 自由に連絡が取りあえるという安心感がある。オンラインでいつでも繋がることが出来るので、学生は理解できない事や、聞き洩らしたことをすぐに質問でき、教員側もチャット文章や動画を用い、授業時間内の指導で足りなかったことを後からフォローできるという安心感がある。
- 授業外学修を充実させられる。学生はチャットへ演奏動画を提出し、それに対する返信動画や楽譜に書き込みなどをしたものを返信していた。特に初心者へは、鍵盤をアップし、合わせて練習できるような動画を作成した。学生は返信動画を見て練習し、次のミート授業内で披露し、更に暗譜をして再度動画で送ってきたが、指導された内容をとても忠実にこなそうと努力している様子が伺えた。この一連の動画等のやり取りは各自のスキルアップにたいへん効果的だったと思う。
- 毎回パワーポイントで板書内容をまとめた資料を学生は画面共有しており、授業時に気づかなかったことも把握していたようだ。
- パソコンとスマートフォンを併用し、スマートフォンはピアノの鍵盤を上から見られる位置にして、全員が手元を見ながら授業を受けている。
- 顔がアップで見られるので、口の開け方の指導はしやすい。
- 全員の授業、グループ授業、個人指導を組み合わせることができて、学生も待ち時間がなく全て練習時間にあてることが出来る。
- 大学への移動時間がないことで、その分授業準備に時間を割くことが出来る。
- 自宅にて一人で演奏できるため、教室での授業よりもリラックスしてピアノを弾いたり、歌ったりできる。特に歌うことへの抵抗感、苦手意識のある学生にとっては自宅の部屋で、教師だけにしか聴かれない環境で歌えることで、ハードルが下がった学生もいるように感じた。

・口の開け方、指の動かし方など細部を映して見せることができ、具体的なイメージを共有しながらの技術指導がしやすくなった。
・画面の範囲が決まっているので、全体像だけではなく学生に何に注目してもらうかフォーカスをあてて授業を視覚的に意識して組み立てるようになった。
・学生と教員双方で画面の位置や角度を調節できれば、譜読み、指遣い、姿勢などの特にピアノに関する技術的なことは比較的指導しやすいと感じた。
・特に初心者に関しては音符、休符は勿論、鍵盤位置も分からない学生が多かったが、テキストを自力で読み、単音で伴奏をつけるなど、とても努力した跡が見受けられた。
・リズム練習の完成度も高い。
・学生にとって動画が残る、ということは頑張って練習してしっかり弾き歌いできたという成果が具体的に残ることでもあり、モチベーションの維持にもいい影響を与えているように思う。

（デメリット）

・チャットには既読機能が無いため、学生達に連絡が行き届いているのかがわからない。
・教員側の授業時間以外の拘束時間・負担が大きい。
・個々の学生に関わる時間が、対面授業時よりかなり長くなってしまい、教員がやれる事を整理し、課題の出し方などを工夫する必要がある。
・家庭での音出し・通信環境の違い（配慮すべき課題）
・家族が側にいる、ピアノが居間にある、などの理由でリアルタイム授業の時間に思いきって歌えない、弾けない環境の学生が数名いる。動画は都合の良い時間に撮影できるので、動画提出を課題とすることで多少なりとも環境の差異を補えたのではと思う。
・実際には授業が始まる時期、学生に大学から大量のGmailが送られており、私たちの授業の案内が埋もれてしまって学生が見ていない例が多く見られました。最も確実に連絡を取れると考えていたGmailですが、やや想定外の事情で確実な連絡手段にはなり得なかった。

以上、オンラインによる表現系の授業に対して、当初、ネガティブなイメージが先行していたが、結果は、予想に反してポジティブな意見と共に学生の成長への驚きも散見でき、教育的な効果があったと言える。

ただし、本来であれば、学生からの授業評価の視点も含めることは必要であり、通年授業後の学生評価においてその辺りも含めた検討を行いたいと考えている。

従って、今回の纏めでは、教員サイドの側面的な検討であるために、その結果は疑問な点もあるが、オンライン授業においての成果は多少なりともあったのではないかと感じられる。

さらに、大きな課題としてあげられることは、このオンライン授業に臨むに当たって、専任教員、非常勤教員合わせて19名であるが事前、授業期間においても多くの情報交換を行ったり、また、実際の授業時には教材作成、個別対応について、対面授業では考えられない時間的労力が必要であり、大変厳しいものであったと言え、どの程度までの範囲を教育できるかについては、今後、検討する必要があると言える。

何れにしても、教員チームによる知恵、工夫、課題からリアルタイムでの取り組み等々が今回の良い効果を生んだ大きな要因と言える。

今後については、今回の取り組みを、対面授業においても生かすことが出来るよう創意工夫が必要であり、まずは学生たちの資質を高められるように深化、検討が必要である。

引用文献

1）有賀亮（2014）玉川大学通信教育ニュースイベント
https://www.tamagawa.jp/correspondence/about/column/detail_7716.html
引用文における参考文献
ドレイファス著、石原孝二訳（2002）『インターネットについて―哲学的考察―』産業図書
野嶋栄一郎編（2002）『教育実践を記述する』金子書房

2）この辺りの研究については、『Patricia K. Kuhl, Ph.D. Professor and Co-Director：University of Washington Professor』の研究である「人との対面による教育効果」を参考にした。（NHK放映より）

3）在原章子（2008）「音楽教育の学科課程の変遷とその実践」東京女子体育大学学内共同研究
※在原によれば、1994年（昭和19年）東京女子体育大学の前身である東京女子体育専門学校の「音体」という領域の音楽授業において「検閲レッスン」という科目があったことが記されている。
その後は俗語として、学習者が自主学習したものを教える側がチェックするだけの傾向が強い教育の意味で用いられてきた。

4）板野平（元国立音楽大学教授、名誉教授）氏による、1993年8月「子どもとリトミック」の講演記録より引用した。

5）有賀亮（2014）前掲書1）

6 筧三智子（1997）「子どもの発達と音楽」音楽之友社

7）笹井邦彦（1994）「幼児の音楽教育に関する研究（Ⅱ）―感性を感化し創造力を喚起する音楽教育プランについてー」『育英短期大学紀要』NO.12

8）細田淳子.笹井邦彦.西海聡子.悠木昭宏.小田切舞美（2017）『かんたんメソッド　コードで弾きうたい（改訂版）』カワイ出版